

本部企画: フォーラム

武道の固有性を新たに問う

— 武道の国際的普及をめぐる —

パネリスト 坂上 康博 (スポーツ文化論・一橋大学)

アレキサンダー・ベネット (日本文化論・関西大学)

司 会

長尾 進 (明治大学)

松尾 牧則 (国際武道大学)

日 時: 平成 23 年 8 月 31 日 (水)

14:40 ~ 16:40

会 場: A会場 1号館 1114 教室

趣 旨

昨年の 43 回大会本部企画では、「武道の国際的普及をめぐる—武道に期待されているもの—」というテーマでシンポジウムが実施された。スポーツ人類学の立場から寒川恒夫氏の「武道の国際化をめぐる」では、「我々が日本固有とか日本独特とか言っているものは、オリジンを意味しているのではなく、日本的な変容を意味しているのではないか」という押さえが大事だという指摘がなされた。また、スポーツ運動学の金子明友氏の「武道と運動感覚」では、芸道としての武道に着目し、至芸の極致に向けて無限の努力志向性を内在させている武道文化は西欧に発する合目的な思考枠組みを脱した身体習練の固有な思想を持ち、〈冴え〉の美意識は身体教育ないし競技の基底に据えられる重大事といえ、国際的に大きく発展することが期待される、と結ばれた。

前回は、武道の国際的普及と新指導要領に示された中学校体育での武道必修化に対して、両者に共通の課題として浮上してくる「武道」の「固有性・伝統性・特性」を「武道総体」としてどう提示できるのかという問題に対し、他学会からの視点から浮き彫りにすることを企図したものであった。また、小笠原泰氏の特別講演（武道とはいかなる意味で日本的なのか - 国際化を「モノ」と「こと」から考える—）との連動、国際学会の開催という本学会の将来構想を見据えてのテーマ設定でもあった。

本年度は、企画委員会での論議を踏まえ、昨年と同様の路線を踏襲し、魚住孝至氏の特別講演「武道の比較文化論的考察」をも考慮し、スポーツ文化論の立場から坂上康博氏、日本文化論の立場からアレキサンダー・ベネット氏に登壇していただき、「武道の固有性を新たに問う - 武道の国際的普及をめぐる—」というテーマで「武道の固有性」への認識を深めていくこととした。坂上氏には「柔術と柔道の伝播をめぐる」と題し、『海を渡った柔術と柔道』の編集作業を通じて発見することができた武道の固有性をめぐるの論点や視点の提示、また、ベネット氏には「武道の固有性と普遍性」について、「美」の観点から武道の「普遍性」を問題にすべきではないか、との提案をいただいた。それらを踏まえて、武道という文化の本質に迫る議論が展開され、24 年度から実施される中学校武道の授業を支える基本的な視点が炙り出されることをも期待したい。

(文責 企画委員長)

柔術と柔道の伝播をめぐって

坂上 康博（一橋大学）

昨年、15名のメンバーで『海を渡った柔術と柔道』（青弓社）という本を出しました。この本で私たちは、柔術と柔道がどのように国境を越えて伝播し、世界各国で根づいていったのかを現地の人々の目線から描くということを試みました。今回は、この本の中から「武道の固有性」という問題を考える手掛かりになりそうな論点や視点を紹介してみたいと思います。

『海を渡った柔術と柔道』の編集は、私にとって未知の世界との遭遇であり、多くの発見と驚きがありました。第1に、柔道に先行して柔術が伝播していたという事実です。それまで柔術に関して私が抱いていたイメージは、殺傷を目的とした“前近代の遺物”といったもので、それが欧米などの先進国で柔道に先駆けて受容されるなどとは思ってもみませんでした。しかし、柔術は現地の格闘技等をなぎ倒し、その圧倒的な強さによって受け入れられていきます。私は、現存する伯耆流柔術等から類推して、この時の柔術の強さは本当だったと思っているのですが、柔術に対する理解をより一層深めることがこうした事実を検証するためにも、また、柔道との違いを理解するためにも必要だと思っています。

第2に、柔道の近代性です。嘉納治五郎のすごさを改めて痛感しました。柔道もまた、その強さによって受容されていきますが、それだけでなくその科学性や合理性によって先進国の人々をも納得させ、近代的な文化として根づいていきます。そうした近代性や説明能力の高さが国境を超える力であったことを改めて確認することができました。

第3に、柔術と柔道が明治期にすでに外国に伝播していたということ。そのスピードの速さに驚きました。そのひとつの理由は、日露戦争が世界にもたらした衝撃および日本ブーム（ジョポニスム）であり、それらが柔術と柔道が伝播していく上での追い風となり、文化的・社会的な受け皿となったということです。柔術と柔道の伝播は、その強さや近代性だけではなく、こうした外的な条件に支えられていたのです。

第4に、柔術と柔道の受容と変容をめぐる多様性とダイナミズムです。主役は、やはり受容する側＝現地の人々であり、彼ら/彼女らの意思とその背後にある社会や文化のあり方が柔術や柔道を変容させ、自国文化としてその国に定着していきます。そのあり方は実に多様ですが、この段階で柔術と柔道は、異文化の“混合物”となります。ブラジリアン柔術はそれを象徴する事例ですが、こうした変容は、時代によって、また、一国内であっても社会階層や世代等によって、つまり担い手のちがいによっても生まれます。

「武道の固有性を問う」という問いは、武道の特殊性と優秀性を証明するという発想に直結しやすく、正当化のための歴史的事実の歪曲といった問題を生み出しがちです。上記のような論点や視点は、そうした問題を回避し、曇りのない目で歴史的事実を理解していくためのひとつの有効な補助線となるのではないのでしょうか。

坂上康博（さかうえ・やすひろ）氏

高知大学教育学部卒、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了、一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得、福島大学行政社会学部講師（スポーツ文化論担当）、英国ウォーリック大学社会史研究所客員研究員等をへて、現在、一橋大学大学院社会学研究科教授。

専攻は、スポーツ史、スポーツ社会学、社会・文化史。著書に『権力装置としてのスポーツ』（講談社）、『にっぽん野球の系譜学』（青弓社）、『スポーツと政治』（山川出版社）、編著に『海を渡った柔術と柔道』（青弓社）、共編著に『のびのび剣道学校』（窓社）など。主たる研究テーマは、日本におけるスポーツと武道の社会史。

武道の「固有性」と「普遍性」

アレキサンダー・ベネット（関西大学）

このシンポジウムのテーマは、「武道の固有性を新たに問い直す」ということであるが、「固有」という言葉は、「日本固有の伝統文化」など、武道にも関連する言葉としてよく用いられる。「固有」とは、「ユニーク」という意味にも解釈されるが、その根底に「優れた」とか「秀でた」というニュアンスがあるのではないかと感じざるを得ない。全ての国の国民は自文化に誇りを持つが、日本は世界の中でも「固有性」というものに執着のある国のように思うし、またそこに日本のユニークさがあるのかもしれない。

「武道の固有性」を論じる時、多くの場合、議論の中心が「武道」対「スポーツ」になってしまう。いかに武道はスポーツではないか、また、武道がスポーツに比べて精神的・文化的に遥かに深淵であり、あらゆるあからさまな「スポーツ」の影響が、武道の本質を「汚す」要因になっているかというものである。その上、しばしば武道は「武士道」という漠然とした、また一面で美化された概念と結び付けられる。良くいえば理想主義的であるが、悪くいえば、「日本人固有の精神」である武士道が身に染みついている外国人は武道を完全に理解することは決してできない、という論理にすり替えられることもあるのではないか。これまでによくみられた「武道がスポーツか否か」という問題の設定は、今後の真剣な議論を進める論点としては単純過ぎるように思う。また、武道の「固有性」をことさらに強調することも、「文化帝国主義」や「エリート主義」に繋がりがかねない面をもっており、文化的劣等感を補うものと捉えられる可能性もありうる。

しかし、武道における「美」を語るならば、固有性を語ることは異なる可能性を提示できるのではないか。武道には「精神性」「競技性」「実戦性」という三つの柱がある。この三つの要素の均衡が保たれてこそ（その均衡は是が非でも保たなければならぬと演者は考える）、武道の実践者はその修行を通じて、「普遍的な価値」を持った世界や武道の「美」を知る術を得ることができ、また、その武道の「美」も人種や宗教に関係なく、あらゆる文化の人々が理解し、敬愛することができるものになる。武道を「固有」たらしめるものは、「日本性」という曖昧な先入観や美化された考えではなく、その「普遍性」なのである。勿論、武道が日本の歴史や文化から生まれたということは、誰にも否定できない事実である。しかし、世界中にすでに非常に多くの武道愛好者がいるという現状を考えると、武道は「世界遺産」として認識されるべきものである。我々が武道の「固有性」について議論するならば、武道のどのような性質が、日本人だけでなく、日本国外の人々にとっても多くの意味を持つことを可能にしているのかをも同時に議論するべき時なのかもしれない。今こそ、「ユニーク」な文化としてではなく、「普遍的」なものとして武道を外から見る時だと感じる。

アレキサンダー・ベネット（Alexander Bennett）氏

1970年、クライストチャーチで生まれる。87年、交換留学生として千葉市立稲毛高等学校で留学し、クラブ活動で剣道を始めたのをきっかけに武道に惹かれ、武士道にも深い関心を抱くようになる。

1994年、母国のカンタベリー大学卒業、2001年に京都大学大学院人間環境学科博士課程修了。2002年から国際日本文化研究センター助手、2006年から帝京大学文学部日本文化学科講師として武道と日本文化全般の国際普及について研究。現在、関西大学准教授。

世界初の英語の剣道雑誌である『Kendo World』を2001年から年に2回発行し、剣道錬士7段、居合道5段、なぎなた5段。『日本の教育に武道を』（明治図書2005年）、『ボクは武士道フリークや』（小学館2006年）、『武士のエトスとその歩み：武士道の社会思想的考察』（思文閣出版2009年）『Budo: The Martial Ways of Japan』（日本武道館2009年）、『日本剣道の歴史： A Bilingual Guide to the History of Kendo』（訳、剣道日本2010年）『The History and Spirit of Budo』（編、国際武道大学武道・スポーツ科学研究所2010年）など日本文化について英語と日本語で書かれた著書が多数ある。